

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2016.10) 平成27年度:87-90.

肺がんのために化学療法を受けている患者が実際に行っている感染予防行動とその行動化に至る背景

新名 茜, 梅澤 晴花, 谷本 沙也加

# 肺がんのために化学療法を受けている患者が実際に行っている感染予防行動とその行動化に至る背景

旭川医科大学病院 9階西ナーステーション

○新名 茜 梅澤 晴花 谷本沙也加

## 【はじめに】

初回で化学療法を受ける患者よりも複数回経験している患者の方が感染予防行動を行える印象があり、化学療法を繰り返す中で、感染予防行動の重要性に気付いたきっかけがあったのではないかと考えた。

## 【目的】

本研究では化学療法を受けた患者が実際に行っている感染予防行動の内容や感染予防行動をとるきっかけとなった出来事、感染に対する認識の変化を明らかにする。

## 【研究方法】

- 1) 研究対象：肺がん罹患しており肺がん化学療法を受けている2コース目以降の入院患者4名
- 2) 研究デザイン：質的關係探索的研究デザイン
- 3) データ収集方法：半構成的面接法

## 【倫理的配慮】

本研究は院内の倫理審査員会の承認を得、対象者には研究目的・方法とプライバシー厳守について口頭及び書面で説明し同意を得た。

## 【データの分析方法】

逐語録を作成し、化学療法を受けた患者が感染予防行動をとるきっかけとなった出来事を

コード化し、共通の意味を持つコードを集めてカテゴリー化した。

## 【結果】

実際に行っている感染予防行動とその行動化に至る背景として20のサブカテゴリーと12のカテゴリーを抽出した。

## 【考察】

化学療法を1度体験し、治療の流れや副作用の出現パターンを理解したことで精神的負担が軽減され、感染予防行動へ目を向けることができた。感染予防行動に至るきっかけとして、【感染予防行動をとるようになったきっかけは白血球が低下した時であった】が明らかになり、実際の体験をすることで罹患性や重大性に対する意識が高まり行動化へ至ったことが明確になった。

## 【結論】

- 1) 実際に行っている感染予防行動は、マスク着用、手洗い、うがい、歯磨き、人込みを避ける、体調不良時の早期受診であった。
- 2) 行動化に至る背景としては、化学療法2コース目以降は副作用を理解できたこと、感染症になると病気を悪化させる危険性を理解したこと、退院を機に感染予防行動に対する意識が高まったことであった。

# 肺癌のために化学療法を受けている患者が 実際に行っている感染予防行動と その行動化に至る背景

旭川医科大学病院 9階西ナーステーション  
新名茜 梅澤晴花 谷本沙也加

学術集会発表用(一般発表)

## 発表者の利益相反開示事項

肺癌のために化学療法を受けている患者が実際に行っている感染予防行動とその行動化に至る背景

発表者氏名	新名 茜	所属/身分	旭川医科大学病院 9階西ナーステーション
企業等の職員	あり・なし	基準に該当ありの場合:企業名等	
企業等の顧問職の報酬	あり・なし		
株式等配当	あり・なし		
講演料等	あり・なし		
原稿料等	あり・なし		
受託研究費(治験)・寄付金等	あり・なし	[企業名、研究機関、支払い予定時期]	
専門的証言・助言等	あり・なし		
贈答品等	あり・なし		

  

研究責任者氏名	新名 茜	所属/身分	旭川医科大学病院 9階西ナーステーション
企業等の職員	あり・なし		
企業等の顧問職の報酬	あり・なし		
株式等配当	あり・なし		
講演料等	あり・なし		
原稿料等	あり・なし		
受託研究費(治験)・寄付金等	あり・なし	[企業名、研究機関、支払い予定時期]	
専門的証言・助言等	あり・なし		
贈答品等	あり・なし		

## I. はじめに

白血球減少は自覚症状を伴わない  
→感染予防行動の習慣化に時間を要することが多い傾向にある

一方で…  
感染予防行動を実施し、感染症を発症することなく、治療を継続している患者も多くなる。

さらに…  
初回化学療法患者よりも複数回化学療法を経験した患者の方が感染予防行動を行えている印象がある。

これらのことから、

患者が化学療法を繰り返す中で、感染について何らかの危機感を感じたり、感染予防行動をとることの重要性に気付いたきっかけがあったのではないかと考えた。

## II. 研究目的

化学療法を受けた患者が実際に行っている感染予防行動の内容や感染予防行動をとるきっかけとなった出来事、感染に対する認識の変化を明らかにする。

## III. 研究方法

- 1)調査期間:2014年7月~11月
- 2)研究対象:肺癌で化学療法を受けている2コース目以降の入院患者4名
- 3)研究デザイン:質的関係探索的研究デザイン
- 4)データ収集方法:がん化学療法を受けている入院患者に協力を依頼し、半構成的面接を行った。面接者は2名とし、面接は1人20分間とした。面接場所は個室を使用した。

## IV. 倫理的配慮

院内の倫理審査委員会の承認を得て実施した。対象者には研究目的・方法とプライバシー厳守について口頭及び書面で説明し同意を得た。

## V. データ分析方法

インタビューより逐語録の作成



化学療法を受けた患者が感染予防行動をとるきっかけとなった出来事についてコード化



共通の意味をもつものをカテゴリー化

## VI. 結果

### 1)対象者の概要

50歳代3名、70歳代1名の男性4名

2)実際に行っている感染予防行動とその行動化に至る背景:20のサブカテゴリーと10のカテゴリーを抽出した。

## VI. 結果

実際に行っている感染予防行動

カテゴリー	サブカテゴリー
実際に行っていた感染予防行動はマスク手洗い、うがい、歯磨き人ごみを避ける、体調不良時の早期受診であった	マスクをしている
	手洗いをしている
	うがいをしている
	歯磨きをしている
	人ごみを避けている
	体調が悪いと思ったら、病院に連絡して受診する
外来で血液データを確認して注意していた	

化学療法開始時に行動化しなかった要因

カテゴリー	サブカテゴリー
1コース目では白血球減少を軽視していた	抗がん剤開始前の説明では、白血球減少の可能性について説明を受けるが、イメージが軽視していた
白血球減少以外の副作用が気になった	白血球減少の説明について印象に残っていなかった 白血球減少よりも食欲不振や悪心などの副作用の方が心配だった
1コース目では感染予防行動の説明を受けていたが行動化に至らなかった	1コース目では感染予防行動の説明を受けていたが、行動化に至らなかった
病院にいれば感染しないと思っていた	病院は清潔だと思い込み、感染予防行動を行わなかった
病院には医療者がいてくれており、何かあっても対処してくれると思った	医療的処置を行うことで症状が改善したため、感染予防行動を行わなかった 入院中は医療者がいるため、感染予防行動を行わなかった。

白血球減少に対する認識の変化

カテゴリー	サブカテゴリー
白血球減少時には感染症を起す可能性があることを理解した	白血球減少のイメージは細菌に抵抗力がなくなると感染症を起す可能性があることを理解した
2コース目以降は副作用を理解し、事前に感染予防行動をとっていた	治療の流れや副作用症状の出現がわかっていて2コース目では事前に感染予防行動をとることができた 肺炎や感染症になると病気を悪化させると考え感染予防行動をとろうと思った 外来化学療法のため、通院を始めたあたりで感染予防行動を強化した
1コース目で白血球減少があり2コース目以降の白血球減少に対して恐怖があった。	1コース目で白血球減少があり、2コース目以降の白血球減少に対して恐怖があった。
感染予防行動をとるようになったきっかけは白血球が減少した時であった	白血球減少が出現し、医療者に指導されたときに感染予防行動を行おうと思った 外来通院時に白血球減少を告げられた際、感染予防行動を行おうと思った





【1コース目では白血球減少を軽視していた】  
【白血球減少以外の副作用が気になった】

初回治療時には白血球減少やそれに伴う合併症に対する認識が乏しく合併症発症の**罹患性と重大性に欠けている**。

【病院にいれば感染しないと思っていた】  
【病院には医療者がおり対処してくれると思った】

院内にいれば大丈夫という誤った認識が**危機感の低下**を招いた。

【白血球減少時には感染症を起こす可能性がある事を理解した】  
院外では感染リスクが高い、自己健康管理をしなければならない

白血球減少と感染症発症の関連付けができ、それが自分に起こりうるという**罹患性が認識できた**

【1コース目で白血球減少があり、2コース目以降の白血球減少に対して恐怖があった】

白血球減少からおこる合併症が死に直結する可能性があることや治療中断を招きえることなどの**重大性を強く感じた**

白血球減少に対する**危機感** → **行動変容**

- 今後化学療法を受ける患者には、安心感を持って治療に参画できるように関わると共に、白血球減少やそれに伴う合併症は治療の中断や死を招く危険性もあることも含めた介入が必要であると考える。
- 退院を機に自身で管理しなくてはならないという危機感が芽生えたことは確かだが、院内では感染しないという認識があるため、白血球減少時には易感染状態であるという意識が高まるような説明をすることが重要である。

### VIII. 結論

- 1) 実際に行っている感染予防行動は、マスク着用、手洗い、うがい、歯磨き、人込みを避ける、体調不良時の早期受診であった。
- 2) 行動化に至る背景としては、化学療法2コース目以降は副作用を理解できたこと、感染症になると病気を悪化させる危険性があると理解したこと、退院を機に感染予防行動に対する意識が高まったことであった。
- 3) 化学療法時には、白血球減少時は易感染状態であるという意識が高まるような説明をすることが重要である。

ご静聴ありがとうございました。